

大田区立龍子記念館

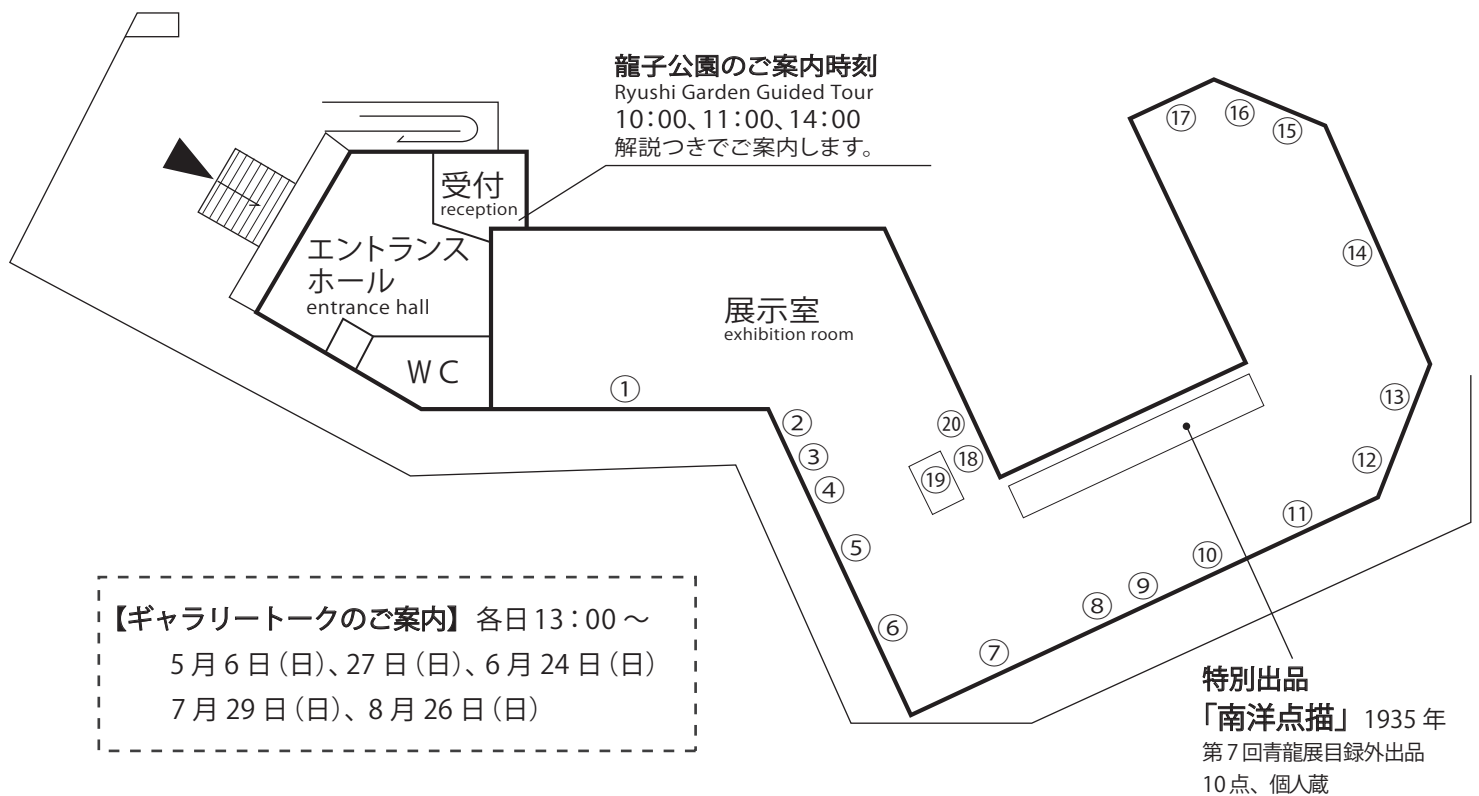
「ベストセレクション 龍子記念館の逸品」

平成30年4月28日(土)～8月26日(日)

Ryushi Memorial Museum

"The Best Of Collection" Ryushi Kawabata Exhibition

April 28 – August 26, 2018



展示作品

展示コーナー1 龍子の代表作、記念館の逸品

作品名	Title	制作年/年齢	サイズ(縦×横)	形状	出品展
① 「虎の間」	Tiger Room	1947年(62才)	245.4×727.2cm	紙本彩色 額装・六枚一面	第19回青龍展
②～④ 連作「吾が持仏堂」	"My Household Temple" Series	1958年(73才)		紙本墨画金彩色・額	第29回ヴェネツィア ビエンナーレ展
② 「不動尊」	Fuduson	89.6×66.9cm			
③ 「十一面観音」	Eleven-Faced Kannon	184.5×121.8cm			
④ 「多聞天」	Tamonten	88.2×67.0cm			(7点のうち3点)
⑤ 「波切不動」	Wave-Riding Fudo, God of Fire	1934年(49才)	342.0×302.0cm	絹本彩色 額装・二枚一面	第6回青龍展
⑥ 「一天護持」	Zao Gongen Guarding the Heaven	1927年(42才)	348.6×223.6cm	絹本金彩色・額	再興第14回院展
⑦ 「草の実」	Seeds of Grasses	1931年(46才)	各 177.2×382.7cm	絹本彩色 屏風・六曲一双	喜寿記念 第3回龍子の歩み展
⑧ 「稲妻」	Flash of Lightning	1942年(57才)	148.3×71.5cm	絹本彩色・額	第2回青々会展
⑨ 「怒る富士」	Mt. Fuji in Anger	1944年(59才)	253.3×193.2cm	紙本墨画金彩色・額	第16回青龍展
⑩ 「爆弾散華」	Bomb Exploding	1945年(60才)	249.0×188.0cm	紙本彩色・額	第17回青龍展
⑪ 「筏流し」	Raft Handlers	1959年(74才)	245.4×727.2cm	紙本彩色 額装・六枚一面	第31回青龍展

展示コーナー2 30代の龍子作品の魅力

作品名	Title	制作年／年齢	サイズ（縦×横）	形状	出品展
⑫ 「妙の浦」	The Fishing Village Where Nichiren Shonin Was Born	1921年（36才）	66.2×84.0cm	絹本彩色・軸	日蓮上人降誕七百年記念展覧会
⑬ 「阿吽」	The A-Um Pair of Lions	1918年（33才）	各 166.6×170.0cm	絹本彩色 屏風・二曲一双	第4回院展試作展
⑭ 「龍安泉石」	Stones of Ryoanji Temple	1924年（39才）	各 185.9×419.4cm	紙本彩色 屏風・四曲一双	再興第11回院展
⑮ 「花と鉋屑」	Flowers and Wood Shavings	1920年（35才）	137.6×108.9cm	絹本彩色・額	再興第7回院展
⑯ 「火生」	Red Fudo, God of Fire	1921年（36才）	237.0×144.0cm	絹本彩色・額	再興第8回院展
⑰ 「土」	Mother Earth	1919年（34才）	151.5×136.4cm	絹本彩色・軸	再興第6回院展

■参考出品

⑱ 「ひまわり」	Sunflowers	明治後期	88.2×37.0cm	油彩・画布・額
⑲ 「女神」	Goddess	明治後期	27.7×12.6cm	油彩・板・額
⑳ 「相撲取組図」	The Figure of Sumo Wrestling	不詳（戦後）	48.5×72.1cm	紙本彩色・額

ほか展示ケース内出品 10点 計 30点

展示解説

■龍子記念館の逸品が語る「龍子芸術」の魅力

1929年に青龍社を設立し、戦時中も途切れることなく龍子は毎年秋の青龍展を開催し続けた。第16回青龍展出品の《怒る富士》（1944年）や第17回青龍展出品の《爆弾散華》（1945年）といった作品からは、展覧会開催が困難な時代においても作品を通じて大衆に訴えかけようとする龍子の芸術観を見出すことができる。戦後の第19回青龍展においては、新旧の龍虎を対峙させた《虎の間》（1947年）を発表し、日本美術を自らが牽引していくという決意が表された。その後、目黒不動尊の《波頭龍図》（1949年）、浅草寺《龍之図》（1956年）と戦災にあった寺院の天井画制作に携わり、龍子は美術の分野からの戦後復興に大きく貢献した。そして1959年、青龍社が設立30年をむかえた年に、長年の功績が称えられ龍子に文化勲章が贈られたのであった。それでも龍子は同年、《筏流し》を発表し、これからも美術界の激流に挑む意思を示したのであった。自らに対しても時代精神に対しても厳しい視線をなげかけ、力強いイメージを生み出していく姿勢こそ「龍子芸術」の魅力と言えるのではないだろうか。

■新収蔵作品含む30代の龍子作品の衝撃

洋画を描いていた龍子が、日本画を描く決意をしたのは28歳の時のことである。日本画家としては遅く感じられるキャリアのスタートであるが、それから2年後の1915年、再興第2回日本美術院展（院展）に入選すると、院展内で注目を集める新人として龍子は活躍の場を得たのであった。本展では、新収蔵作品《阿吽》（1918年）を初公開している。龍子が33歳の時に描いた若々しさ溢れる衝撃的一作は、1915年に日本画家・平福百穂中心に結成された「珊瑚会」でも実験的作品を生み出していた龍子の野心が二頭の獅子に全面的に表わされていると言える。その後、《土》（1919年）や《花と鉋屑》（1920年）のように洋画へと回帰する画風を経て、色彩のインパクトを追求した《火生》（1921年）、大画面に挑んだ《龍安泉石》（1924年）といった作品に「会場芸術」の萌芽をを読みとっていくことができる。

次回展予告

■名作展「異国の風景 エキゾチシズムへの熱狂（仮称）」平成30年9月8日（土）～12月9日（日）

1930年から40年代の激動の時代において、龍子の視線は海外へと向かっていました。そして、中国での取材からは《源義経（ジンギスカン）》（1938年）を含む「大陸策連作」、マレーシア・タイ等の印象からは《水雷神》（1943年）を含む「南方篇連作」が生みだされました。本展では、大画面に表わされた異国の光景から、龍子の異国への熱狂と作品に内在化された時代精神に焦点を当てた構成とします。